

発刊の辞 新たな社会のベンチマークとして

『生涯学習基盤経営研究』創刊号（通巻第 34 号）をお届けする。私たち東京大学大学院教育学研究科生涯学習基盤経営コースが刊行する初の紀要となる。本コースは、現在、社会教育学・生涯学習論領域と図書館情報学領域の二つの研究室から構成されるが、この紀要も研究室やコースの構成に応じてその名称を変えてきた。創刊当初は、社会教育学研究室『社会教育学・図書館学研究』（第 1 号～第 19 号，1977 年～1995 年），その後、生涯教育計画講座社会教育学研究室『生涯学習・社会教育学研究』（第 20 号～第 30 号，1996 年～2005 年），生涯学習基盤経営コース社会教育学研究室『生涯学習・社会教育学研究』（第 31 号～第 33 号，2006 年～2008 年）となり、生涯学習基盤経営コースが 2006 年度に成立して 3 年経った今年、再び、社会教育学・生涯学習論と図書館情報学の両研究室が手を携え、本コース紀要を、名称を新たに『生涯学習基盤経営研究』と改めて、研究交流誌として新創刊する運びとなった。

このようなコース紀要の名称変更はまた、本研究科内の研究室・コースの構成がその時々々の教育学研究の枠組みとその背景にある社会構造の変容を反映したものであることを物語っている。本コースの名称である生涯学習基盤経営とは、さまざまな解釈があろうとも、基本的には生涯にわたる人々の学習の社会的な基盤のあり方を考え、その望ましい形を模索するという価値志向性に貫かれているものといつてよいであろう。このとき、重要なのは、本コース名には明示されていない「社会」であると思われる。

私たちはとくに 1990 年代以降、日本社会にとどまらず、世界的な大きな変動の中にある。それは、基本的には経済のグローバル化・情報化・サービス化によって国民経済の枠組みが動揺することで招かれる社会の流動化として語るができる。それはまた、国民経済の基礎である産業社会がつくりだした国民国家というフィクションの枠組みを曖昧なものとし、さらにはその枠組みを構成する主体である「国民」というフィクションそのものをも解体に向かわせる。

このことは、国民国家の形成のために整備されてきたさまざまな社会制度、端的には学校教育制度や社会教育制度の組み替えを導き、そこで育成される目的としての国民という概念とその形成のあり方、つまり教育内容と方法との再考を求めることになる。すなわち、国家の枠組みを基本とした価値と知識の伝達・蓄積による国民の形成と市場の拡大・労働力の育成という、人間の理性をベースにした普遍性を前提とする、ストックをイメージさせる教育から、国家の枠組みの動揺・解体と社会の流動化を前提とした、価値多様性と個別性を基本としつつ、人々が自ら積極的に社会にアクセスし、コミットすることで、社会が常に流動的に組み換えられていくこと、つまり相互作用的に個人と社会とが変化し続けるフローをイメージさせる学習へと、いわゆる教育のあり方が移行していくのである。

このような教育から学習への移行は、また、社会の構成と関わりがある。つまり、国民経済を基礎として、国民国家の形成を枠組みとする社会においては、権力の存在する場所が中心であり、その権力を人々が意識し、受け入れ、内面へとストックすることで、自律的な国家の担い手である国民の形成が企図されてきた。いわゆる「規律訓練型社会」である。しかし、昨今の流動化する社会は、権力の所在が曖昧となり、人々はその社会に自らの意思でコミットすることで、社会を構成していると思いつくことによって社会がある方向へと形成されていく、意識せざる管理、つまりアーキテクチャや

ニューロ・コントロールと呼ばれる社会技術が活用されることによる「環境管理型社会」へと移行している。

そして、このような社会の移行は、そこで暮らし、その社会を担うとされる人々の自我の構成をも組み替えていく。つまり、従来の産業社会ベースの国民国家では、国民である人々は、人間としての普遍性を基礎として、国家的な価値をもつ知識を蓄積することで、形成されたが、そこでは持続する自我が前提とされていた。いわば、ストックすることで過去と未来とを貫くようにして存在する自我の形成が予定されていたと見てよい。それはまた、明示的な権力を内面化して、その内面化された権力から自らを見つめる他者の目をもつことと同じである。時間軸を一貫して存在する実存としての自己であるという。社会的価値の内面化による、意識し、判断する、自律した自己である。

しかし、流動する環境管理型社会における自我は、めまぐるしく変化する社会にあって、常にその社会が提示する多様な価値に激しく反応しつつ、それらを嗜癖化していくことが求められる。それは、自立・自律や意識・判断とは無縁な自己のあり方であり、むしろ、器官が動員され、感覚が作動することによる自己の環境すなわち外部への投げ出しである。

このことは、自我の構成を近代社会が求めるヒエラルキー型の構造から多極分散的なフラット型の構造へと組み換えることになる。

そして、これは知のあり方をも変容させる。いわば権力の明示化つまり価値の一元化による知の独占的な産出・伝達と蓄積・適応による体系の構築から、権力が不可視化し、分散による遍在化が招く価値の多元化が知の多様化・多重化と流動化を導く、知のスーパーフラットな空間への配置、つまり見え過ぎることによる不可視化が進行することへと移っていくことになる。

このような社会の変容の中では、従来のような教育制度がもっていた境界は溶解し、すべては個人の学習へと還元されることになる。それはまた、社会が人々を配置するシステムから、人々が流動することで包摂されるプロセスへと移行していることをも示している。

私たちは、いま、このような時代の大きな転換点に立っているといっても過言ではない。このとき、私たちのコースが生涯学習基盤経営と名称を変え、社会教育学・生涯学習論と図書館情報学という、これまでの教育学における知の伝達体系にあってはマージナルな位置を占めていた領域の研究室から構成されていることの意味を改めてとらえ返す必要がある。それはまた、このマージナルな領域から、知の創造と構成を通じた、新たな社会を構想するということでもある。

私たちは、『生涯学習基盤経営研究』を、このような時代にあって、新たな社会を構想するための挑戦的・意欲的な試みを提示し、教育学研究の新たなベンチマークとすべく、この世に送り出したいと思う。この新創刊号（通巻第 34 号）に集録された、コース・オープンラボにおける生涯学習をめぐるパネルディスカッションも、こうした試みの一環である。このパネルディスカッションでは、それぞれ立場の異なる 3 名のパネリストから、「学習」という社会をつくり出す営みに対してアプローチが試みられた。本号には、それを受けて本コースの教員からなされた学習の社会的な基盤についてのいささか挑発的な(?) 応答も収められている。私たちは今後も、コースとして研究を組織しつつ、知の創成と循環の試みを続けていきたいと思う。

多くの方々のご支援と忌憚のないご批判をお願いしたい。

2010年3月
牧野 篤